橘隈寺跡第4次発掘調査現地説明会資料

1982年11月27日　　奈良国立文化財研究所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1・調査の経過

当研究所では昭和54年以来、明日香村橘前に所在する橘隈寺跡の発掘調査を継続してきた。その間、第2次調査では金堂跡、第3次調査では講堂跡の規模をそれぞれ確認しており、主要伽藍の配置が次第に明らかになりつつある。

今回の第4次調査は、於美阿志神社境内地の2個の礎石が残る土壇、塔の東側の回廊と推定されている部分、講堂北側の畑地の3ケ所に調査区を設定し、7月5日から発掘調査を実施している。調査面積は830㎡である。

2・検出遺構

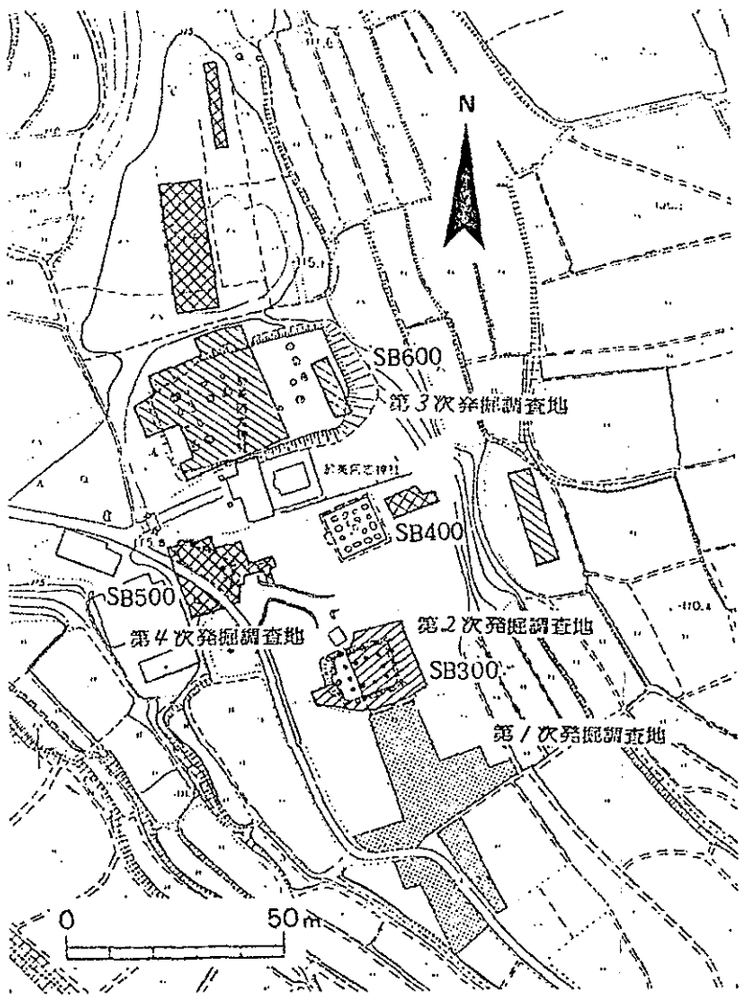
基壇建物（門SB500）　塔の西方にあたる土壇は、道路等によって削られ、著しく変形しているが、従来回廊跡、あるいは西塔跡とも推定されていた。

調査の結果、版築を伴う建物基壇であることがわかり、基壇上面で3個の礎石抜き取り穴を確認し、残存する礎石は円柱座の造り出し（直径60㎝）があること、基壇の西縁は玉石列となっていることが認められた。しかし、南縁・東縁・北縁については後世の削平・撹乱が著しく、明確な基壇範囲は確定できなかった。なお、基壇上には礎石建物廃絶後と考えられる石列の据え付け痕跡などがある。

基壇の築成は、整地面（濃茶色土）上に褐色土を主にして数層の粗い版築が行なわれている。礎石は築成後に据え付けられている。基壇高は礎石上面で0,9mを測る。版築土の存在、礎石位置から、この遺構は回廊跡ではなく、基壇建物の残存部分であることが明らかであり、2個の礎石と3個の礎石抜き取り痕跡から3間×3間の建物が想定できる。各柱間寸法は、南北2,8m、東西2,3mとなり、基壇の出は1,7mとなる。また、本建物心を東に延長すると塔の心礎心に一致することから、この礎石建物を門と考えることが可能である。また、基壇北縁付近では基壇土が北に張り出した部分があることから、回廊がとりついたものと考えられる。

なお、基壇版築土中からは7世紀前半に比定できる土器片が数点出土しているが、基壇築成状況、礎石の形態を同じくすることなどから、金堂とほぼ同じ時期とみられ、塔・講堂よりは築成が遡るようである。瓦は、藤原宮式の軒丸・軒平瓦が若干出土している。

東面回廊　塔の東側にあたり、昭和44年奈良県教育委員会によって一部調査された箇所である。調査の結果、先に検出された礎石の北側に新たに1個の礎石と、東側の2ケ所に礎石の抜き取り穴を検出した。調査区の北・南側は大規模な削平を受け、東側も遺構面が若干削られている。南側の礎石は上面が平らな自然石で、北側の礎石は小型であるが円柱座の造り出し（直径40㎝）をもつ。いずれも地山面に直接据え付けられている。



礎石の西1,5mに南北溝を検出した。下部には古い溝の痕跡が認められたが、溝底近くまで後世の瓦層が堆積している。下部の溝は、回廊の雨落溝と考えられる。2個の礎石および2個の礎石抜き取り穴から復原できる回廊の桁行は3,7m、梁行は3,6mである。

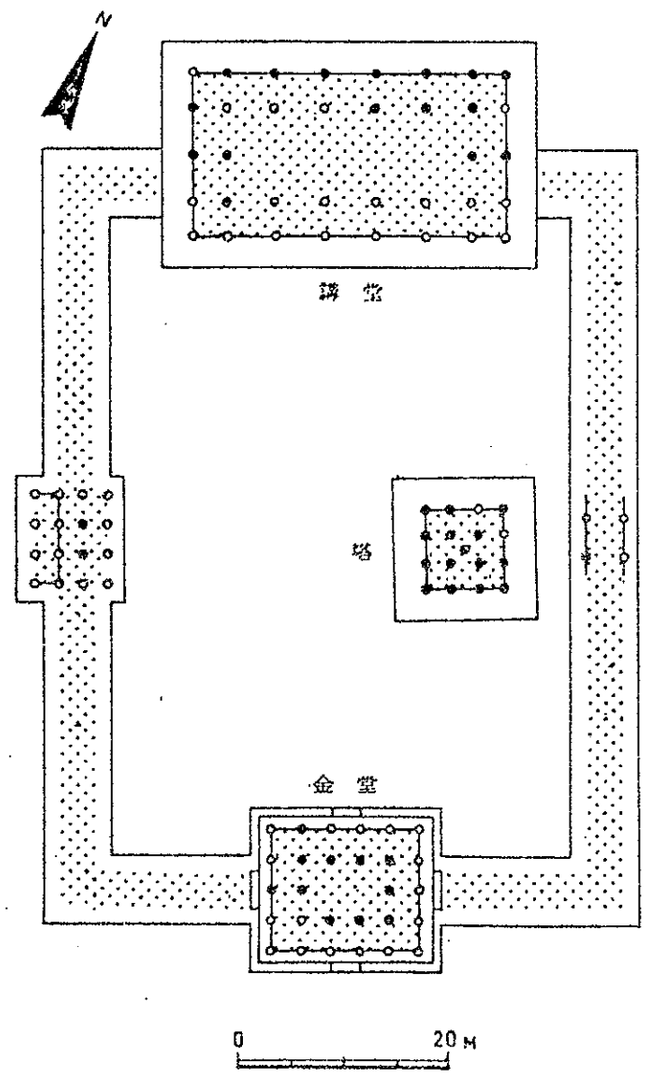
遺物はすべて後世の瓦層中からの出土であり、鉄滓、丸・平瓦、および金堂・講堂跡出土と同一型式の軒丸・軒平瓦がある。

奈良国立文化財研究所

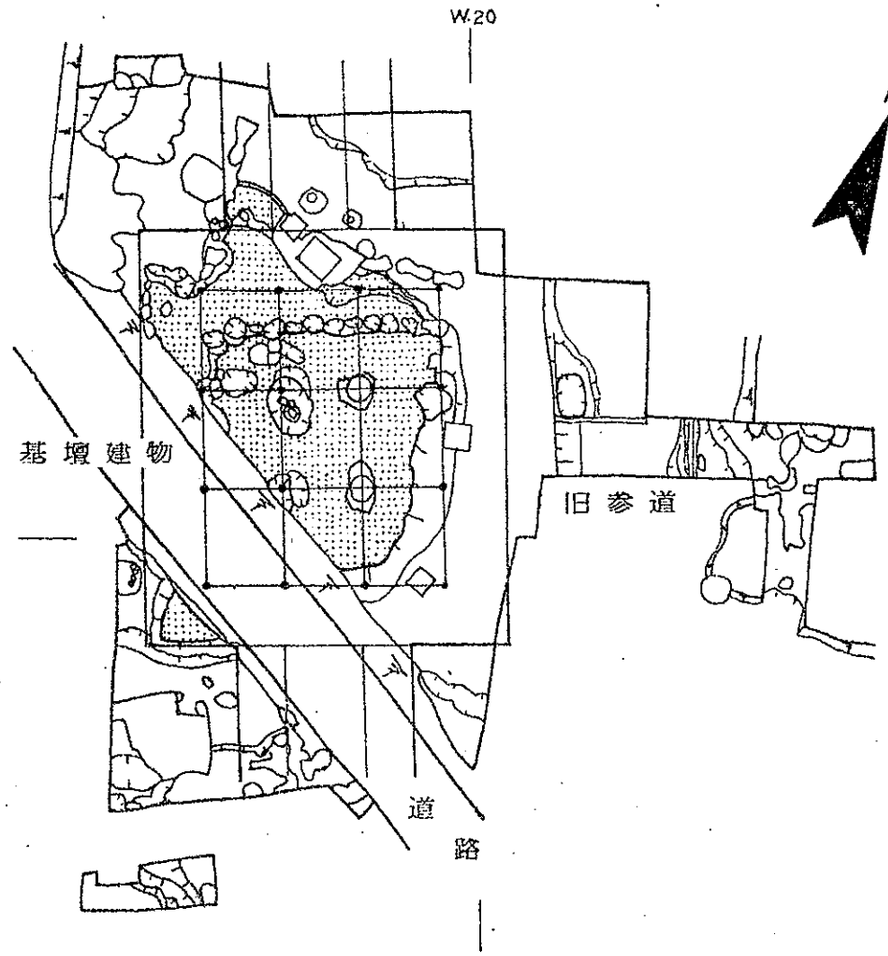
講堂北方　講堂北方では、従来明らかにされていない僧房などの付属施設および、寺地の北限を確かめるため調査を行なったが、耕作に伴う溝を検出したのみで、みるべき遺構は検出されなかった。境内地よりも約1,5m程低いことから、後世の大規模な削平があったとも考えられる。

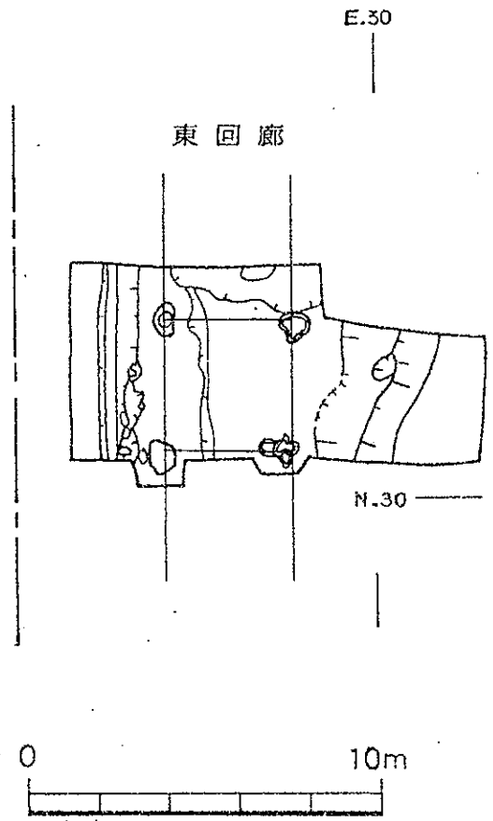
4・まとめ

今回の調査では東面回廊の一部が明らかになった。基壇建物は削平が著しく、基壇縁の一部および柱間寸法を明らかにしたにとどまったが、調査の結果から3間×3間の建物を復原することが可能である。しかし、伽藍全体の配置や規模についてはまだ未解決の問題が多いといえよう。



伽藍想定復原図





遺構図（1:200）